

雨水市民の会

会長 辰濃 和男

〒131-0032 東京都墨田区東向島1-8-1
TEL: 03-3611-0573
FAX: 03-3611-0574
HP: <http://www.rain-water.org/>

雨から心といのちを考えてみませんか -東本願寺と環境を考える市民プロジェクト

シンポジウム

東本願寺と市民がともにできること

11月21日(金)

～いのちと自然のこれから～

今年3月、雨水市民の会が世界水フォーラムに取り組んでいたころ、日本下水文化研究会を通して、京都の東本願寺の僧侶から寺の修復にともない雨水利用の導入ができないかとの話が持ちかけられました。

雨水市民の会では、これが「世界水フォーラムin京都」の宣言にそった実践につながると考え、積極的に協力していくことになりました。東本願寺の大屋根に降った雨水は、地域の防災や環境学習に活用できます。また敷地に降った雨水を地下に浸透させれば、京都の水循環の復活につながります。東本願寺における雨水の貯留、浸透、利用は、京都の水文化再生のシンボルになるでしょう。

先般、9月6日、「京都・雨水利用をすすめる会」などの環境市民団体、東本願寺の僧侶たち及び大会が東本願寺の渉成園に集まり、11月21日のシンポジウムに向けともに協力してい

くことで正式に合意しました。

当会のプロジェクト担当の人見達雄さんは言います。「ここにありては南無阿弥陀仏、いのちにありては南無雨陀仏」。今回のシンポジウムを、壮大な夢を実現化する第一歩として位置づけ、みんなの力で成功させていきたいと思ひます。舞台は京都ですが、足を運んでみませんか。翌日22日(土)の第3回あまみず公開セミナー「フィールドワーク - 京都の水文化を訪ねて」(P2参照)とセットで参加されると、より理解が深まると思ひます。

参加希望者は、21、22日の宿泊(大谷婦人会館:素泊1泊3500円)希望も記入し、11月11日(火)までに事務局へFAXで申し込んでください。

目次

寄稿 摩訶不思議な雨 真宗大谷派僧侶 蓮容健	2
募集!第3回あまみず公開 セミナー「京都の水文化を 訪ねて」	2
東本願寺の歴史	3
地下水盆に浮かぶ京都の まち	3
雨水利用技術者セミナー のご案内	4
雨水利用国際協力・支援と グローバルネットワーク報 告会に参加を	5
雨を活かす中央線に	6
雨水貯留浸透の普及に関 する動向	6
「風」コーナー	7
村瀬事務局長、国際雨水資 源化学会副会長に	8
国連が雨水利用に注目し 始めた	8
“保水型下水道”を考えよ う!	8

日時：2003年11月21日(金) 午後6時から8時30分まで
会場：真宗本廟(東本願寺) 真宗本廟視聴覚ホール
主催：11.21シンポジウム実行委員会

(雨水市民の会からもメンバーとして参加)

プログラム

<問題提起>

- ・玉光順正(真宗大谷派教学研究所所長)
「いのちと自然のこれから - 親鸞聖人の教えから」
- ・伊藤延男(元東京国立文化財研究所所長)
「宗教建築の原点 - 御影堂からみる自然のイメージ」
- ・村瀬 誠(雨水市民の会事務局長・国際雨水資源化学会副会長)
「いのちのはじまりとしての雨水」
- ・板倉 豊(京都精華大学人文学部環境社会学科助教授)
「東本願寺再発見 - 環境問題を学ぶ場として」

<自由討議>

テーマ「東本願寺と市民がともにできること」

- ・コーディネーター:酒井 彰

(流通科学大学教授・日本下水文化研究会代表)

シンポジウム終了後、交流会予定

大谷婦人会館



奇稿 摩訶不思議な雨

真宗大谷派(東本願寺)勤務

真宗大谷派僧侶

はすい

蓮容 健

仏教の言葉に「摩訶不思議」という言葉がある。「摩訶」とはインドの古い言語の音写で、「大いなる」「偉大な」という意味をもち、「不思議」とは文字通り思議できないということ。つまり、「人知では思いはかることのできないこと」を意味し、感動の意を含んでいる。

「雨水市民の会」を通じて出遇った雨水もまさに「摩訶不思議」。これまで雨水といえば「利用」「治水」程度しか思い浮かばなかった私を「いのちの起原」「文化のみなもと」としての雨水に出遇わせ、さらには、予想もしない多くの人たちとの出遇いをもたらしてくれた。そして、雨水を邪魔者にし、捨てる方法ばかり考えている日常生活を振り返らせてくれた。

さらにこのことは、「雨水」ばかりでなく、「動植物」さらには「人」をも含めた、あらゆる「いのち」、つまり、自然の摂理によって誕生した人知では到底思いはかることができないものを邪魔者にし、排除している我々の日常生活を照らし出してくれた。

私は、縁あって僧侶となり、仏教の教えに出遇い、上述のようなことを先人の言葉として読み、話として聞いていた。しかしながら、今、「雨水市民の会」に出遇わせてもらった「雨水」との付き合い方に対する問題提起は、それらの言葉や話を身をもって感じさせてくれるものであった。

このような出遇いを通じてもう一つ思い出したことがある。私は東京の生まれで、幼少の頃、玉川上水や神田川でよく遊んでいた。毎日「魚とり」や「桑の実とり」といった遊びを通じて、多種多様な生き物と出遭い、時に「生死」というものにも無意識のうちに出遇っていたのではないかと。はたし

て、今の子どもたちはどのようなところで遊んでいるのか。そんなことを考え始めた。

今、「雨水」との出遇いを通じて、私が勤務している京都駅前の東本願寺で一つの試みを模索している。

京都という地は、各宗・各派の本山が多数あり、そのような伝統教団は、広大な敷地を有し、伝統的な伽藍とともに池や庭園を保存し、そこに多種多様な動植物を育ててきた。もちろん、それらは人間が造りだした人造物であるが、長い年月の中で自然との融和がはかられていることが多く、原生林などとは違った「人間社会」と「自然」との付き合い方を学ぶ上で、貴重な存在となっているのではないかと考え始めた。

そのような場が、京都駅前の東本願寺にも残っている。あらためて「いのちのつながりを学ぶ場」、「発見の場」として再発見していきたい。修学旅行で学ぶ「何時代の誰が建てたのか」程度の参拝でなく、現代社会が抱える環境問題を学ぶ場として、役立てることはできないか。そんなことを現在模索している。

まさに、私が体験したような摩訶不思議な出遇いが、ここ東本願寺を訪れる様々な人たちにも広がることを夢見て、小さな歩みからはじめていきたいと思う、今日この頃である。



交流会にて御影堂の小屋組や防災設備の案内をする蓮容さん

募集! 第3回あまみず公開セミナー

フィールドワーク 京都の水文化を訪ねて

テーマ:太古から培われた地下水盆や琵琶湖疎水など、その恵まれた水とともにある京都の自然や暮らしの一端に触れ、京都の水文化を探る。



11月21日開催のシンポジウム「東本願寺と市民がともにできること～いのちと自然のこれから」に合わせ、翌22日にあまみず公開セミナーとしてフィールドワークを企画しました。

参加したい方や興味がある方は、柴(Eメール: CBE03058@nifty.com)又は事務局へのFAXで、11月11日(火)までにご連絡ください。追って詳細をお知らせします。

21日に宿泊した方は、早朝からの行動になります。当日京都へ到着する参加者は、下鴨神社で合流していただいても結構です。また翌23日も宿泊できる方には、別途追加コースを思案中です。なお、費用は交通費、入館料、飲食代など各自負担となります。

11月22日(土)

(おおよその予定)朝食後

9時頃 蹴上の琵琶湖疎水記念館

10時30分頃:下鴨神社・糺(ただす)の森

当日のみ参加の人はここで合流。お弁当または今出川付近で昼食。

13時30分頃:篠田染工(絞り染め体験工房)

見学とお話(体験の合間に、染物や暮らしに係わる水、その変遷等を伺う)

16時頃:堀野記念館(キンシ正宗の造り酒屋)

見学と試飲。中にある地ビールの飲めるレストランで、軽く打ち上げ。

18時頃解散

東本願寺の歴史



1895(明治28)年、東本願寺御影堂、阿弥陀堂の再建、そして2年後、琵琶湖疎水から防火用水などの水として本願寺水道が引かれた。(「真宗本廟両堂等御修復瓦懇志記念」絵葉書より)



京都の駅前にある東本願寺は、世界最大の木造建築。御影堂(写真)と阿弥陀堂の屋根面積は12,500㎡もある。



盆地は地下水盆に豊富な地下水を蓄え、京都の1200年の歴史を支え続けてきました。その水に支えられ庭園、茶道、酒、湯葉、豆腐、菓子、染物など京都独自の文化は、日本の文化の原点でもあります。

高度成長時代から京都の水もおかしくなってきました。染物を鴨川で晒す友禅流しは、昭和30年頃から見られませんが、工場廃水や生活排水でドブ川となり、涸れ川となって小さい堀割の多くは埋められてしまいました。地下鉄や大きなビルが建って、地下水の水位が下がってしまった地域もあります。

しかしながら、神社仏閣が多い京都だからこそ、守られている水もあります。例えば、「糺(ただす)の森」。「糺」は澄みきった水が湧くところという意味があり、古代の水源地として信仰の場所だったそうです。町が都市化してきているなか、

1262(弘長2)年、親鸞が90歳で亡くなり、京都大谷に埋葬され、廟堂が建てられました。この廟堂が本願寺となりますが、1465(寛正6)年、その力を恐れた比叡山の衆徒により破却されます。その後、越前(福井県)吉崎、河内(大阪府)出口、京都山科と転々と本拠地を移しました。浄土真宗は、ただ念仏して弥陀に救われる親鸞の他力本願の教えから、熱狂的な信者が集団となって既存の宗教と軋轢を起し、一向一揆などが起きました。

1532(天文元)年、法華宗徒に襲われ、本願寺は焼き落とされます。逃れた摂津(大阪府)石山を本山としますが、さらに1570(元亀元)年、織田信長に攻められ、10年後明け渡しました。

信長が没した後、豊臣秀吉は本願寺を優遇し、京都堀川七条の地を寄進して、本願寺(現西本願寺)となりました。跡継ぎ問題で兄弟が争い、秀吉の裁定で兄が弟に職を譲りましたが、1602(慶長7)年、兄のほう徳川家康から烏丸六条の地(現東本願寺)を寄進され、本願寺は2つに分かれま

した。

その後も時の権力に追従して災禍に幾度となく翻弄されます。東本願寺は江戸時代に4度の火災に会いません。1864年、「禁門(蛤御門)の変」により、ついに焼失してしまいました。

明治維新の混乱期後、御影堂、阿弥陀堂再建のため、当時の最高の技術者、尾張の伊藤平左衛門、西京の木子棟梁が棟梁となり、全国の信者が一丸となって再建に取り組みました。全国から巨材の献納が相次ぎ、三河の瓦30万枚、尾張、大阪から1200畳の畳など寄進されました。また、防火のため、わが国最初の日本人による土木工事で作られた琵琶湖疎水から、「本願寺水道」を引きました。こうして、1895(明治28)年、両堂が落成し今日に至っています。

11月21日に開催されるシンポジウム(1ページ参照)の問題提起者のひとりである伊藤延男さんは、御影堂建立の棟梁である伊藤平左衛門の曾孫にあたるそうです。(高橋朝子)

地下水盆に浮かぶ京都のまち

京都は古より鴨川、高野川、桂川が北から南へと流れ、山々に囲まれた

この鴨川と高野川の合流地点にある下鴨神社を囲むように守ってきた森です。葵祭は、ここを流れる御手洗川で斎王が褌をしてから、神前に葵を献じます。

11月22日の第3回公開セミナーでは、このような京都の水文化を訪ねます。ご期待ください。

今回、京都関係の記事が多くなってしまいました。東本願寺でのシンポジウムの準備のため、3月から何回も京都に通ったためです。

水に関係ないのですが、東本願寺の御影堂の小屋裏を東本願寺の僧侶の蓮容さんに案内してもらったとき、伊藤平左衛門さんの直筆の署名が、携わった職人たちといっしょに屋根の頂上近くに納めてありました。小屋裏の暗い中、複雑に組み込まれた巨木群は、削ったばかりで今書いたように墨鮮かに文字が読み取れ、明治の職人たちの声が聞こえてくるようでした。樹木が生きた年齢だけ材木も持つといわれ、中には2000年以上前の木もあるそうです。(高橋朝子)

雨水利用技術者セミナーのご案内

今後、雨水利用が社会のなかに根をおろしていくには、事業者の役割は極めて重要です。行政が雨水利用の指針をつくり、助成制度を整備しても、また市民が雨水利用を自宅に取り入れようとしても、雨水利用を設計したり、アドバイスしたりするプロの建築士や設備士がいなければ、実を結びません。

ドイツでは、fbrという雨水利用をはじめとする水の有効利用を推進していくための専門集団が、雨水利用機器メーカーなどと共同で、定期的に雨水利用の技術者セミナーを開いています。内容は雨水利用の政策から技術、最新の事例にいたるまでとても充実しています。

そこで、雨水市民の会では、fbrの協力も得ながら、雨水利用技術者セミナーを開くことにしました。対象は、建築士、タンクや住宅メーカーなど事業者が中心になります。開催にあたっては、雨水利用技術者養成講座を行政レベルで実施し

てきた墨田区と雨水利用事業者の会との共催で行われる予定です。

今回の第1回雨水利用技術者セミナーでは、fbrの理事であり、ドイツで数多くの雨水利用の設計を手がけてこられたクラウス・ケーニツヒ氏をドイツからお迎えし、ドイツでの雨水利用の設計と事例について最近の実情にも触れていただきながら講義していただくことになっています。また雨水利用の建築と設備及び事例については、佐藤清(株)テクノプラン代表取締役や小川幸正(大林組資源・エネルギーエンジニアリング部)副部長、岡田誠之(東北文化学園大学)教授が、また雨水利用のバックグラウンドと自治体の取り組みについては村瀬誠(墨田区環境保全課環境啓発主査)が講義する予定です。

なお、このセミナーとは別に、雨水市民の会の会員向けにケーニツヒさんを囲んで、ドイツの雨水利用の動向を聞く機会も設けます。ふるってご参加ください。

日時：2004年2月6日(金) 9時～17時
 場所：すみだリバーサイドホール・1階会議室
 主催：雨水市民の会
 共催(予定)：墨田区、雨水利用事業者の会
 受講料：30,000円(テキストのCD代含む)、同時通訳付き
 講師：
 クラウス・ケーニツヒ(fbr理事)
 佐藤 清(株式会社テクノプラン代表取締役・建築家)
 小川幸正(大林組資源・エネルギーエンジニアリング部副部長)
 岡田誠之(東北文化学園大学教授)
 村瀬 誠(墨田区環境保全課環境啓発主査)
 申し込み：
 対象は、企業や事業者が主体になりますが、会員も申し込みできます。申し込みは、事務局まで12月中旬までをお願いします。振込み方法などの詳細は、追って通知します。定員(40人)になり次第、締め切らせていただきます。



ドイツの雨水利用最前線・ケーニツヒさんを囲んで

日時：2004年2月7日(土) 14時～17時
 場所：すみだ国際ファッションセンター・109会議室
 主催：雨水市民の会
 参加費：1,500円、通訳付き
 なお、終了後ケーニツヒさんを囲んで懇親会を予定しています。



雨水利用国際協力・支援とグローバルネットワーク報告会に参加を

雨水市民の会では、2000年からバングラデシュにおいて「スカイウォーター・プロジェクト」を展開してきました。プロジェクトとの名前を「レインウォーター（雨水）」でなく、「スカイウォーター（空の水）」としたのは、日本とバングラデシュの雨の由来が同じだからです。同じモンスーン地帯に暮らす仲間として、スカイウォーターを活かして、バングラデシュの人たちや生き物たちの尊い命を救うのに少しでも役立ちたいという思いからです。本年7月には、「スカイウォーターのプラント」が完成し、次に地元で雨水利用の成果をあげている「NGO フォーラム」と協働で、雨水を集める竹製のキットを普及していくプロジェクトが展開されています。スカイウォーター・プロジェクトは新たな段階を迎えます。

また、本年8月には、地球規模の雨水利用ネットワークを作り上げていくために、村瀬事務局長はじめメンバー4名が、アメリカ・テキサス州オースチン市で開催された第1回アメリカ

アメリカとメキシコの雨水利用会議に参加して

2003年8月19日から約2週間の日程で、村瀬事務局長をはじめ私たち4人は、第1回アメリカ雨水利用国際会議（ARCSA主催）と第11回雨水利用国際会議（IRCSA主催）に参加してきました。

「オースチン会議」では、アメリカにおける様々な雨水利用の事例発表が2日間に渡って行われ、村瀬事務局長が、日本の雨水利用の現状と課題について報告しました。最終日の見学会では、スーパーマーケットの巨大な屋根を利用した雨水利用施設、雨水貯留・浸透と利用をしている動物病院、雨水をボトリングして販売している企業の工場などを見学しました。また、雨水利用ガイドブックをまとめた「マキシムポテンシャル研究所」では、雨水のカスケード利用など、ハード、ソフトの両面から実に多くのことを学ぶことができました。オースチンはブッシュ大統領の自宅があるところです。村瀬事務局長は、同研究所に集まった多くのアメリカ若手建築家たちを前に講演を行い、ブッシュ大統領の自宅の100トン規模の大きな雨水タンクを紹介し、「タンク（戦車）よりタンク（雨水タンク）を」と訴え、拍手喝采を浴びました。

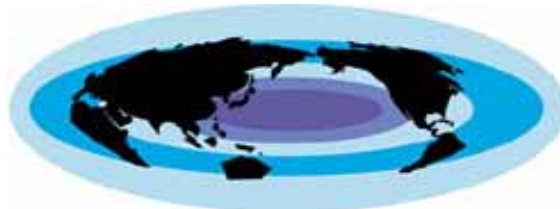


テキサスで開催されたアメリカ雨水利用会議で村瀬事務局長が日本での事例を紹介しながら、国際的な雨水ネットワークの必要性を訴えた。

雨水利用国際会議とメキシコのメキシコ・シティで開催された第11回雨水利用国際会議に、雨水市民の会として参加しました。

今後どのように国際協力・支援を推進していくのか、バングラデシュのスカイウォーター・プロジェクトとアメリカ・メキシコの国際会議の報告をもとに、みんなで考えたいと思います。

日時：12月6日(土) 午後2時～5時
会場：すみだ環境ふれあい館(雨水資料館併設)
墨田区文化1-32-9 03-3611-6355
内容：
バングラデシュ・スカイウォータープロジェクト報告
アメリカ、メキシコ雨水利用国際会議報告
意見交換
会が終了後、忘年会を催します。お気軽に参加ください。



メキシコシティでの第11回雨水利用国際会議では、日本からは、村瀬事務局長の他、喜多島根大学教授などが日本における自治体と市民の雨水利用の取り組みや屋上緑化と雨水利用などについて発表しました。また、会議場の一角に「雨水市民の会コーナー」を設け、英文と日本語の新聞記事やパンフレット、出版物を並べ、雨水利用の地球規模のネットワークの推進を訴えました。メキシコはスペイン語ですが、似た言語のためか、ポルトガル語版の「やってみよう雨水利用」が大変な反響を呼びました。

メキシコも地下水のヒ素汚染があることを聞いていましたので、水道水(地下水)などを持ち帰って検査したところ、わずかですがヒ素が検出されました。また、溜めていた雨水からは、アルミニウムと亜鉛が検出されるという興味深い結果がでました。

こうした結果の詳細は、12月6日に報告しますので楽しみに。
(中臣昌広、小沢一昭)



メキシコ・シティで開かれた第11回雨水利用国際会議では、役員を選出が行われ、村瀬事務局長が国際雨水資源化学会の副会長に選出された。

雨を活かす中央線に - グリーンネックレスの活動の紹介 -

いま、三鷹、小金井一带に住む人々の間で「新しく造られるJR中央線の高架に降る雨をいかに活かすか。いかに大地に戻すか」ということが、論議のマトになっています。

2008年完成予定の三鷹、立川間の中央線高架は、長さが13.1kmです。この高架の上に、1年間で雨が約17万立方メートル降ると推定されています。これは1日462立方メートルの雨水にあたりますから、相当な量です。これをそのまま下水道に流してしまうのか。それともタンクにためたり、大地にしみこませて大切に使うことにするのか。

小金井市に本拠をおくNPO法人「グリーンネックレス」が提唱しているのは、中央線沿線にある東京農工大をこの運動の「モデル地区」にするということです。現在、農工大では井戸水を使っています。地下水を汲み上げている量と、大学の構内に降る雨をそのまま下水に捨てている量をあわせると、年間28万立方メートルになります。この量を軽減するためには、中央線の高架軌道に降る雨の一部を農工大に導き、貯水槽

にためて使ったり、構内に水路やピオトープを造り、降った雨をきちんと大地に返す。そういう方策を考えたかどうかという趣旨で

す。グリーンネックレスの人々の話を聞きながら、市民が中心になって、この夢、この事業を支えていくという強い意気込みを感じました。

JRがどう考えるか。行政がどこまで踏み切るか。まだまだこれからの問題は多いのですが、この「夢」は、雨水活用の体系を創り上げてゆくための、大切な実験的事業の一つになるでしょう。高架という鉄道軌道に降る大量の雨を下水道に流すことなく、新しい「水の道」を創る、雨を「水の循環」の自然軌道に乗せる、という壮大な試みなのです。（辰濃和男）



雨水貯留浸透の普及促進に関する動向



平成11年の福岡や都内の豪雨による水害、翌年の東海水害など、近年、ヒートアイランド化等による集中豪雨が頻発するようになり、浸水被害の危険度は増大する傾向にあります。

これまで、昭和55年から始まった「総合的な治水対策」により、遊水地や河道の整備、公共施設への貯留浸透施設の設置等が行われてきました。しかし、用地取得が難しいことや公共施設のみの貯留浸透施設の数の限界などから、新たな対策が求められています。

今年の6月、従来の治水対策をより確実に推進することを目的として、「特定都市河川浸水被害対策法」が成立しました。関係省庁との調整・政令の制定などを経て1年以内に施行されます。

この法律の特長は、雨水貯留浸透施設の設置を法的な根拠の下に義務付けることが可能となり、その普及促進に大きな弾みとなる可能性があることです。具体的には、河川管理者の責任による特定流域の雨水貯留浸透施設の整備、下水道等の事業者である自治体による、利益を受ける他の自治体(例えば下流の市町村)への費用負担請求、条例化による各戸の下水道排水設備の貯留浸透化の義務付けなど、が可能になります。従来の下水道排水設備では、宅地排水は公共下水道に直結させることを原則としていましたが、今回、条例として貯留浸透機能を付加させることができるようになります。

また、雨水流出抑制のための規制としては、開発による流出の増加に対し、防災調整池や浸透トレンチなどの対処をして都道府県知事の許可を受ける必要が生じ、知事は一定規模以上の既存防災調整池を保全調整池として指定して、埋立て等には届出の義務付け、機能を損なわないための知事による助言・勧告ができるなどの措置がとられることになりました。さらに、洪水によって浸水が想定される区域を、指定・公表したり、地下街などの地下施設管理者への情報伝達や浸水対策計画作成の努力義務が位置付けられました。

この特定都市河川に指定される条件は、都市部を流れる河川であること、著しい浸水被害が発生したか発生する恐れがあること、従来の河川整備(ダム、河道改修、遊水地など)では浸水被害を解消することが困難であることの3点です。神田川(東京)、鶴見川(神奈川・東京)、新川(愛知)、寝屋川(大阪)等の全国30~40河川が想定されています。

今後、この法律で指定される流域の自治体では、雨水貯留浸透施設を普及させるための各種補助・融資制度を検討していくことが必要となります。これまで雨水の有効活用を提言してきた私たち雨水市民の会においても、利水と治水、あるいは貯留と浸透の両方に施設をバランスよく活用していくための取り組みを進めていくことが求められます。

(宮村昌幸)



第2回あまみず公開セミナー 10月11日 「平安の気象予報士 紫式部 - 雨と源氏物語」 に参加して

「紫式部は、きっと気象が好きだったに違いない」。講師、石井和子さんの確信です。

源氏物語には、霜のような小さなものから台風や寒冷渦まで、気象現象が実に正確に描かれ、物語の展開にリアリティや深みを与えているそうです。

たとえば、失脚中の源氏が須磨で嵐に出合う場面の雨は、激しいときで80ミリを超えるすさまじさだったろう、と言います。また、源氏の息子の夕霧が紫の上をかいま見る「野分」の帖の台風は、昭和9年の第一室戸台風に進路、規模ともにそっくりだと、現代の気象科学からも判断できるそうです。興味深い話の数々に、源氏物語をきちんと読んでみたいと思われた方も多かったのではないのでしょうか。

出席者は34人。会員25人、非会員9人でした。寄せていただいた感想には、気象と源氏物語という異質の組み合わせの面白さに加えて、アナウンサーである石井さんのよく通る声、講演しているときはまた一味違う「朗読」の迫力に感動した人も多かったようです。

挨拶に立った村瀬事務局長の「日本の文化 - 日本人の精神的特質と雨との関連を今後も調べていきたい」という言葉を心にきざみました。(糸賀幸子)



11月の東本願寺でのフォーラムに向けて京都の市民グループと打ち合わせ。合間に東寺で一休み...東本願寺PT

雨水探検隊 稲刈りで得たお米の価値

10月1日は都民の日。9月初旬のような暑さの中、墨田区の小学生からなる雨水探検隊は、約50人で千葉県のぼっけの北方に稲刈りに行きました。この刈り取った稲



は、6月に探検隊で田植えをした稲で、今年の冷夏にも負けず、たわわに実っていました。田植えから稲刈りの間の管理は、北方のボランティアの人たちにお世話になっていました。

墨田区には田んぼがなく、稲刈りの経験をした子どもはほとんどいません。稲刈りの際、田んぼへ入るのを怖がったり、入ってもすぐに出てきてしまう子がいるかと思うと、面白くてキャーキャーとはしゃいでいる子もいました。子どもたちにとって、田んぼや稲刈りは新鮮に映ったようです。普段食べているお米が作られる様子が分かったようで、子どもの中には、「いつも食べているお米が作られる大変さを知った」という発言もありました。

雨水探検隊の子どもたちにとって、今度の稲刈りは非常によい経験になったようです。ここで収穫したお米は、各学校で干してもらっています。それぞれ玄米の状態にして、11月中旬に収穫祭を行い、雨水探検隊で食べる予定です。

(高橋佑司)

雨水利用をPR、雨水タンク作り講習会inすみだまつり

10月4、5日に錦糸公園(総武線錦糸町駅北口)で開催された「すみだまつり・こどもまつり」に、雨水市民の会もブースを出し、雨水利用のPR・雨水タンク作り講習会・雨水タンクの展示販売を行いました。お天気にも恵まれ、2日間で30万人の人出だったそうです。

多くの方が、雨水タンクの前で足をとめて興味を示し、用意したレインキャッチ15個と蛇口6個は完売しました。皆さんにタンクの説明をしていた高原純子さんは、「男の人は、自分で作れそう、ということで、レインキャッチと蛇口を買っていきけれども、女性、とくにおばあちゃんは、簡単に作れるとはい

ってもなかなか自分ではできないので、実際にお宅に行ってみて、細かくお手伝いしてあげることが必要かもしれない。」と言っていました。雨水利用に対する関心が高まり、「雨水利用ってなに？」から「雨水利用をやってみたい！けど、どうしていいかわからない」という段階に入っていることを感じました。人によって、予算、タンクに求める性能、タンクを置けるスペース、住んでいる自治体による補助金制度の有無など条件が異なります。今後雨水市民の会で、どのようにアドバイスしていけるかが課題です。(笹岡京子)

村瀬事務局長、国際雨水資源化学会副会長に！

今年の8月、メキシコで開催された第11回雨水利用国際会議において、村瀬事務局長が、国際雨水資源化学会(IRCSA)の副会長に選出されました。IRCSAは、1982年に設立され、2003年までに11回の国際会議を行うなどの活動を行ってきました。村瀬事務局長は、1997年からIRCSAの都市担当理事を務めてきました。

IRCSAには、3人の副会長がいて、「人のネットワーク」「情報の収集と発信」「国際会議」を担当しています。村瀬事務局長は、「人のネットワーク」の担当です。今後、IRCSAは、雨水利用を実践している人々のネットワークづくりに力を入れ、世

界各地での雨水利用の優れた成果を必要な地域に移転していくことをねらっていくそうです。将来、このネットワークが、私たちが目指している、国際雨水センターを支えるマンパワーにもなることを期待したいと思います。

今年の世界水フォーラムでは、迫り来る世界の水危機に対して、産官学民の雨水利用のネットワークを地球規模で作り上げていくことが提起されましたが、村瀬事務局長による人のネットワークづくりに期待が集まります。雨水市民の会も市民のネットワークづくりの点で、IRCSAと協力し、村瀬事務局長を支援していきたいと思ひます。(笹岡京子)

国連が雨水利用に注目し始めた

国連事務局次長であり、国連環境計画(UNEP)の理事長であるKlaus Toepfer氏は、UNEPの機関誌である“*Our Planet*”の淡水特集号(2003.6.5)で、水を大切にす一人一人の行動がいかに重要かを説いています。世界の水問題で雨水利用は重要な解決法となるでしょう。大阪にあるUNEP国際環境技術センターでは、世界各国の節水方法や技術をデータベース化しています。その中の雨水利用に関する事例を紹介します。

雨水利用は、先進国、開発途上国いずれにおいても今後広く普及する可能性がある。日本の墨田区にある両国国技館は、8400m²の屋根に降った雨を集め、便器の洗浄水や空調に使っている。

中国では、17の省で500～600万個の雨水タンクが設置され、農地用の灌漑用水の予備として用いられている。さらに15万人に飲料水として供給している。

ニジェールの家庭では、大きな葉を持った木から雨を集め、樋から甕にためて水を得ている。

今年の世界環境デーの標語に、「水、20億人の人々が水のために死んでいる」とあります。水1滴1滴の価値を理解することによって、水に対する尊敬の念を新たにすることは、それ以外の40億人にとっての義務となるのではないのでしょうか。(仲井圭二)

“保水型下水道”を考えよう！(下水文化研究発表会)で発表



途上国には、適切な衛生設備を持たない24億人から30億人の人たちがいますが、私たちが利用しているような下水道システムを単に押し付けるのではなく、地域ごとにどのように衛生を確保するのかを考えることが重要です。今回、下水文化研究発表会では、「衛生の原点 - 地球規模の衛生の改善を考える」をテーマに発表があります。基調講演は、「途上国における衛生改善への挑戦」と題して、バングラデシュのDr.Hoqueが行います。

昨年6月に市民の会が行った下水道料金の勉強会から発展し、京都の世界水フォーラムでは「保水型下水道」の考え方を提示しました。今回、倉宗司さんが、「小金井市式雨水浸透ます事業から考える保水型下水道の実現に向かって」、人見達雄さんが「南無雨陀仏と保水型下水道」と題して発表します。ここでは、倉さんの発表の内容についてご紹介します。小金井市では宅地化が進むとともに雨水の浸透が難しくなり、地下水、湧水が減少し、野川も下水路化してしまいました。このようなことが、一般市民の環境に対する関心を引き起こし、徐々に行政に影響を与え始めました。市は「雨水の積極

的涵養による湧水の復活」を挙げ、雨水浸透させることに市全体が力を入れています。

倉さんは、雨水をそのまま下水に流してしまうのではなく、地下に浸透させて従来の下水道の負担を軽くすると同時に、雨水を有効に活用することが必要だと訴えます。「保水型下水道」の概念を明らかにして、下水道の負担金が少なくなるという仕組みができれば、多くの人がその仕組みを利用し、地下水の復活につながるのではないのでしょうか。関心のある方は是非お出掛け下さい。

日時:11月15日(土) 9:30 - 17:30

会場:日本水道会館

〒102-0074 千代田区九段南4-8-9

(JR及び地下鉄の市ヶ谷駅から徒歩3分)

参加費:無料。ただし講演集(会員1000円、非会員1500円)を購入する必要あり。

申込み・問合せ先

〒162-0067 新宿区富久町6-5 NJS富久ビル別館3階

NPO法人日本下水文化研究会 事務局

FAX:03-5363-1129 E-mail:jade@jca.apc.org